

# 内モンゴルにおける言語衰退と民族意識

敖特根 苏布徳

## 第一章 「内」モンゴルと「外」モンゴルの区別

### 1. 「内」モンゴルと「外」モンゴルの区別

「内」モンゴルと「外」モンゴルの名前の由来は、清朝までさかのぼる。「内」と「外」の区別は、満州人が蒙古を支配した時、先に取り入れたモンゴルを内政治区、その後に取り入れた砂漠（ゴビ砂漠）の北を外政治区と呼んだことに由来する。所謂「内」と「外」の名称は、蒙古人自ら付けたものではない。蒙古人は砂漠の南の蒙古人と地域を Obor と呼び、砂漠の北の方を Aru と呼んだ。Obor は腹、Aru は背で、身体にちなんで名づけた [札奇斯欽 1987: 7]。現在における内モンゴルのモンゴル人は、内モンゴルを南モンゴルという。外モンゴルを北モンゴルまたはモンゴルと呼び、南北の意味で区別している。中国語になると、「外蒙」或いは「外蒙古」になるが、もともとの「北」という意味をまったく感じ取ることができない。

清朝は、首都の北京に近いモンゴル南部を内モンゴル、北京から遠い北部を外モンゴルと名づけ [岡本 1999: 199]、内モンゴルを六盟四九旗に、外モンゴルのハルハ四部を四盟八六旗に編成したのである。1911 年に、辛亥革命で、清朝の崩壊が外モンゴルの独立を可能にした<sup>1)</sup>。

一方、内モンゴルは一九一二年に成立した中華民国に組み込まれた。一九一二年から一九四九年の三十七年間に数回、デムチグドンロブ<sup>2)</sup>（徳王）は、日本軍の力を頼って独立を図ったが、最終的に失敗に終わった [金岡 2000: 27]。一九四七年、中華人民共和国が設立する二年半前、モンゴル人の共産党員の指導で内モンゴル自治区が成立した。新しく作られた中華人民共和国は外モンゴルの独立を認めた。

共通の言語、習慣、信仰を持つ民族が、国家という境界線で二つに分かれた。境界線は実際に存在するか、あるいは想像したものであるか、いずれにせよそ

の境界線のもたらした影響はけっして小さくない。一九九二年に中国とモンゴル国が外交を結ぶまで、モンゴルとの自由な出入りは禁止だった。

### 2. 内モンゴル社会の現在

こうした歴史的背景の中で、内モンゴル自治区は中華人民共和国の切り離すことのできない領土となった。中華人民共和国の最北の領土である内モンゴル自治区に、2004 年の統計<sup>3)</sup>によれば、モンゴル人は 417.08 万人が住んでいて、全自治区人口 2384.35 万人の 17.49 % にすぎない [内蒙古自治区民委、語委 2004: 1]。内モンゴルはモンゴル人の自治区でありながら、モンゴル人人口率はけっして高くない。従って、モンゴル民族を主体として、漢族が多数を占める多民族自治区と呼ばれる内モンゴル自治区で、長期間にわたって漢人と接触したことによって、モンゴル人の文化、言語、社会に大きな影響が生じつつある。モンゴル人の子供達は圧倒的に中国語が使われる環境の中で暮らし、将来の就職、進学などの難しさにより、中国語学校に通う学生が多くなってきている。そのため、中国語モノリンガルへ変化していく傾向が見られる。中国語ユーザーは社会的に高い地位に置かれて、内モンゴル地域の政治、法律、メディアまでの広い範囲を占めている。モンゴル語が使われる範囲が狭く、形だけになっているところが多い。会社の印鑑や機関の看板や大きな集会ではモンゴル語を中国語と一緒に使うが、経済分野では、日常業務でほとんど使われてない。内モンゴル地域におけるモンゴル語はコミュニケーションの手段としての社会的な機能を失いつつあり、モンゴル人は同化の危機に晒されている。

## 第二章 内モンゴルにおけるモンゴル人の言語使用

### 第一節 モンゴル語の位置づけ

中華人民共和国憲法第四条は、「各民族は自己の言語・文字を使用し発展させる自由を有する」と規定し

ている。中華人民共和国民族地域自治法第十条に、「民族自治地方の自治機関は各民族の言語及び文字の使用と発展の自由を保障する…」記している<sup>4)</sup>。とは言っても、モンゴル民族全員は必ずしもその権利を享受しているわけではない。

モンゴル人のモンゴル語の能力は地域、年齢、などさまざまな要因によって異なる。モンゴル人のモンゴル語能力に関しては、大雑把に三つに分けられる。モンゴル語のモノリンガル、モンゴル語と中国語のバイリンガル、中国語のモノリンガルである。モンゴル語のモノリンガルと言っても、中国語をまったくできないわけではない、モンゴル語と中国語のバイリンガルといっても、どちらかひとつの言語がもうひとつより優れる場合もある。言い換えれば、バイリンガルの線をどこで引くかが問題である。一九八〇年代の調査では、内モンゴル自治区のモンゴル人約249万人のうち、220万人(88%)はモンゴル語が出来るのに対し、約29万人(11%)はモンゴル語ができず、中国語を使っている。前者の内、モンゴル語のモノリンガルは58%というから、この数字をもとに計算し直せば、一九八二年ごろ、内モンゴル自治区のモンゴル族のうち、モンゴル語のモノリンガルは127万6千人(51%)、モンゴル語と中国語の双方ができるものは92万4千人(37%)、中国語のモノリンガルが29万(12%)で、四割近くが二言語話者だったことになる[岡本1999:211]。

内モンゴルは中国の領土であるため、中国語は内モンゴル社会において、経済、法律、メディア、など高い地位に置かれているのは言うまでもない。清朝、中華民国、中華人民共和国と異なる歴史段階によって、内モンゴルへ移住してきた莫大な数の漢人の移民はモンゴル民族の人口を地域人口のわずか17%を占めるような結果まで減少させた。モンゴル人は漢人との接触によって、モンゴル人の言語使用に大きな変化が現れた。現在、西部の牧畜地域に、年長のモンゴル人にはモンゴル語しか話さない人がいるのに対して、東北部の、すなわちモンゴル人が一番集中して住んでいる地域のモンゴル人はモンゴル語と中国語をまぜて話し、モンゴル語と中国語の混合語をモンゴル語と意識している。

## 第二節 調査におけるモンゴル人若者たちの言語意識

1. 筆者が行ったアンケート調査<sup>5)</sup>(有効回答数300件)の結果によれば、若者たちはモンゴル語について悲観的ではない。

モンゴル語で放送されるテレビ番組を見る人は96%(288人)で、モンゴル雑誌を読む人は94%(283人)で、モンゴル語学校に通うモンゴル人学生は、モンゴル語雑誌とテレビを利用していることは明らかである。「普段は何語で話をするのが好きですか」という質問に対して、73%(220人)が「モンゴル語で話をするのが好き」と答えた。「中国語で話をするのが好き」と答えたのは23%(68人)である。

## 2. モンゴル人学生の中国語に対する態度

若者たちは中国語で話すことが格好良いとみなしている。中国語は「先進民族」の言語であり、モンゴル語は「後進民族」の言語と考えられ、モンゴル語で話したら、劣った人間と思われるのである。漢語能力と意識についての質問に対して、漢語を習いはじめたのはほとんど小学校に入ってからになる。67%(202)の人が小学校に入ってから漢語を勉強し、小学校に入る前勉強した人は28%(85人)を占める。中国語をどの程度話すかについて、漢語がかなり上手な人は57%(170人)を占める。まったく話せない人はひとりで、漢語に自信ないものが43%(129人)である。漢語能力の満足度については、満足している29%(87人)で、満足しない人はわずか13%(39人)である。したがって、内モンゴルのモンゴル族の学校において、学生の漢語レベルはかなり高いといえる。

内モンゴルにおけるモンゴル人学生は漢語を小学校から習い始めている。中国語の自己評価もかなり高いと言える。87%(261人)は満足している。なぜモンゴル語を話すことが恥ずかしいと思うのかという質問に関して、ほとんどの人は、身の回りの人は中国語が漢人と同じくらい上手に話せるからだという。中国語は国家語で、我々は中国人だからという意見もある。全然気にしないと思っている人たちは、我々はモンゴル人で、母語がモンゴル語だから中国語が下手なのは当然だという。しかし、中国語が下手で、恥ずかしいと思う人は56%(167人)で、全然気にしないと答えたのは44%(133人)である。

## 第三章 民族の自己語り

### 第一節 漢人との結婚

#### 1. Aが語るトゴルダイガチャの通婚

漢人とモンゴル人の間の通婚はウーシン旗では珍しくなくなっているように見える。A(モンゴル人男性、72歳)の住んでいるトゴルダイガチャは現在

表 1 「トゴルダイガチャにおける通婚詳細」

娘の 父親の名前	結婚した年	教育程度	職 業	相手の職業	嫁 先	親による 反対は
ダリ	1984	高校	公務員	公務員	旗	強く
オウジン	1988	小学校	農民	農民	旗	少し
ジャハダイ	1988	中学校	仕事なし	労働者	都市	強く
グチンテグス	1995	高校	会社員	会社員	都市	少し
グチン	1997	高校	会社員	運転手	旗	少し
センゲ	1997	小学校	仕事なし	労働者	陝西省農村	不明
エルデニ	1998	小学校	仕事なし	農民	陝西省農村	強く
バガス	2001	小学校	仕事なし	農民	陝西省農村	不明
アルビンチチグ	1999	専門学校	教師	運転手	ソム	少し
ガルザンジャブ	2000	中学校	仕事なし	労働者	旗	強く
バガダリ	2001	専門学校	仕事なし	労働者	旗	不明

(注) A の話 (二〇〇五年二月二十日) により作成

(二〇〇五年) 人口 510 人で、世帯は 101 戸がある。A はここに一九七五年引っ越して来てから現在に至るまで、本ガチャに 11 例の漢人との通婚が見られるという。101 世帯に漢人の八世帯 (30 人) が含まれているが、その八世帯との通婚は一例もない。11 例の結婚いずれもモンゴル人の女性と漢人男性の結婚であった。漢人男性の職業は、農民が三人、会社の運転手が二人、工場での労働者は四人、公務員と会社員は一人ずついる。

陝西省の農民と結婚した三つのケースにおいて、相手の漢人は出稼ぎの人で、トゴルダイガチャに仕事を探し回っているうちに知り合った。北部に住むエルデニはひどく怒って娘を殴ったが娘は、漢人の男性と逃走した。結婚式すらあげられなかった。ジャハダイも反対したら、漢人の男性がジャハダイの目の前で、自分の小指を切り落とし、娘への誠意を表した。結局娘を連れて都会に行った。とにかく最初は漢人との通婚にみんなが大騒ぎしていた。だんだん現在は、前ほど騒がなくなっている。

一九八〇年代、初めての漢人との結婚はダリの娘さんの結婚だった。彼女は、親が反対したにもかかわらず、結婚した。その後女の子二人を生んだため、漢人の旦那さんと離婚手続きをしているそうだ。あの漢人は悪いやつで、離婚を決めてからわざと大借金を作って半分をダリの娘に返済させるつもりでいるという。親の言うことを聞かないからこんなことになる、と、A は言う。11 例の通婚においては、程度が異なるが、ほとんど全員が親に反対された。だが、やめた人はひとりもない。

漢人が嫁をもらうときに、現在 2 万元から 3 万元を支払うといわれているが、バガダリの娘をもらう漢人は婚約したときに千元しかくれなかったそうだ。本当にモンゴル人を馬鹿にしている。現在トゴルダイ周辺の漢人が婚約するときに 2 万元から 3 万元使う。A のお手伝いである李から聞いた話で確認できた。

## 2. A の親戚における通婚

うちには 7 人の子供がいるが、漢人と結婚したものは一人もない、と A の話は自慢のように聞こえる。しかし現在ウーシン旗のどのモンゴル人家族においても、親戚の中から漢人との通婚例のない家族は一つもないと断言する。A の親戚の中、A の奥さんの姪二人が漢族と結婚した。姪は二人とも都会で仕事を持って働いている。一人の姪は大学卒業して、税務署で働く公務員で、一人は専門学校を卒業して自分の美容室を持っている。A は言う。「本来はモンゴル人と結婚できるはずだった。姪がモンゴル人の彼氏と付き合っていたころ家に連れて行ったら、姪の父親は貧乏だという理由で不満だったそうだ。そしたら、姪が金持っているからいいでしょうと漢人を連れてきた。父親はうれしくなかったが仕方なく同意した。姪が嫁に行った家族は通信会社を営んでいて、大資産家ではないが普通の人よりは金を持っているようだ。結婚したらすぐ、部屋と車が揃った。もう一人の姪が、モンゴル人男性と離婚した。そして、現在の漢人と結婚した。どうやら、前の夫は彼女が気に入ってなかったみたいである。現在一人の娘がいる」。A のいところが漢人の嫁をもらった。A は「漢人に娘をやってうれしい親

はひとりもない」], と言う。

### 3. A の通婚への解釈

漢人がモンゴル人と結婚したがる理由は、「子供を二人まで生めることができるからだろうと」、A は言う。一九七九年から始めた漢族に対する一人っ子政策では、少数民族は免除され、第二子まで認められる。漢人、特に農村戸籍を持つ漢人は男の子がほしくて、罰金が科せられても子供を産むのをあきらめない。女兒を間引きする生々しいこともあった。漢人にとって、モンゴル人と結婚することは男の子を生める確率をあげることであった。何より漢人にとって、モンゴル人女性を嫁にもらうことは、漢人の女性をお嫁に採るよりはるかに安いのだという。

「モンゴル人の男性がたくさんいるのに、なぜわざわざモンゴル人の女性が漢人を夫に選ぶのか、その理由がわからない。牧畜地域で生まれ育ってまともな中国語さえできない女の子が、次々と漢人と結婚するのは不思議でたまらない。漢人男性と結婚すれば生まれてくる子供は漢人になる。漢人の嫁さんをもらえばべつだけ」], と A は言う。

### 4. B が語る漢人像と通婚

B (モンゴル人女性, 43 歳 幹部)

「私は漢人との付き合いは長い。小学校から大学まで漢族学校に通っていたからだ。学校ではモンゴル人だからといじめられたことはなかった。それより、うちの学校ではモンゴル人の子が強かったからかもしれない。私が小学校に入った年はモンゴル学校が遠かったため、中国語学校に入った。クラスの半数がモンゴル族の子供だった。それに校長先生が、父親だった。小学校クラスメートから、漢人男性と結婚したのは二人しかいなかった。残り全員はモンゴル族同士の結婚だった」。

モンゴル人の女性が漢人の男性と結婚しているのが多く、漢人の女性とモンゴル族の男性の結婚はわずかである。漢人を結婚相手に選ぶ理由は、奥さんに優しい、モンゴル人の男性はお酒が好きで、怠け者が多い。漢人の男性は家事を分担してくれる。炊事も洗濯も掃除も全部やる人が多い。自分の家族や妻、子供には苦勞させたくないという気持ち強い傾向がある。モンゴル人の男性には男性至上主義的な人が多く、家事とかをあまりやらない。何よりも漢人は現在金持ちが多い。しかし、漢人の男がモンゴル人の女性と結婚したがる理由として考えられるのは、子供を二人生め

るからということと、モンゴル人の嫁をとる時に漢人嫁と同じく莫大な金かからなくてすむからだろう。

「実際、漢人と結婚しても先は楽ではない。結婚とは二人の生活だけではなく、結婚によっていろいろなかわりが生じる。結婚生活において一番困るのは、家にお互いの親戚が訪ねてくることである。お互いの親戚と付き合うことが一番難しい。生活習慣の違い、言葉の違いのため、数多くの摩擦が起こる。漢人の本来の姿とは、テレビドラマでよく見られる皇帝の身の回りの世話をする大鑑だ。それは典型的な漢人だと思う。漢人は表面で笑っていても人を平気で裏切る。モンゴル人は好き嫌いがすぐ顔に出る。通婚によって結ばれた家では、一緒に生活においてお互いに差別しないが、心の中ではやはりお互いの民族を見下ろす」。

B の経験から、漢人とモンゴル人の間に生まれてくる子供の民族籍に関しては、ほとんどの人はモンゴル民族を選ぶという。理由は、民族優遇政策を受けられるからである。大学に入るとき、政府機関で昇進するとき、モンゴル人であれば得する場面もあるからという。学校は中国語学校に通わせるほうが多く見られる。

### 5. 通婚で見るモンゴル人と漢人の関係

現在適齢期を迎えつつある世代についてみれば、もはやモンゴル人はモンゴル人同士、漢人は漢人同士といったエスニックグループ内婚の傾向は崩壊しつつある。しかし、わずか一世代前まではモンゴル人の民族内婚は根強く守られていた。筆者が集めた情報の限りでは、ウーシン旗トゴルダイガチャに、モンゴル人以外との通婚は一例もない。

オルドスは父系社会であるので、父親、母親のどちらがモンゴル人かで混血の意味が違ってくる。モンゴル人は、昔から親戚を「血の親戚」と「骨の親戚」と二つに分ける。母方の親戚は「血液の親戚」といい、父方親戚は「骨の親戚」と言う。モンゴル人は血よりは骨を大事にする傾向がある。なぜなら、モンゴル人を決める要素は血ではなく、骨であるからである。つまり父方の民族に従う。だから、漢人の女性をお嫁に入れることを、モンゴル人の女性が漢人の男性と結婚するほどには強く反対しない。それは、漢族の女性から生まれてくる子供はモンゴル人になり、モンゴル人の女性から生まれてくる子供が漢族になるからである。この理由から、漢族の男とモンゴル族の女との通婚に反対する。しかし「漢人なんかと結婚してはダメだ」「モンゴル人はモンゴル人と結婚するのが一番」

と子供の結婚相手を必死に制限しても、結局通婚の増えているのが現状である。

モンゴル人社会に、漢人の勤勉さについて、ステレオタイプ的な見方がある。それに対して、モンゴル人男性は「酒飲み」「怠け者」「アルコール中毒」というステレオタイプが固定化している。

経済的な一面も無視できなくなっている。モンゴル人は「酒飲み」で「怠け者」であるということは収入の少なさを意味する。それに対して、漢人は勤勉で、目的に達したいならあらゆる手段を使う。漢人には収入の見込みがあると考えられる。トゴルダイガチャの通婚状況を見れば、通婚相手の漢人は農民、労働者がほとんどで、特に当地のモンゴル人男性より経済的な余裕があるようには見えない。トゴルダイガチャの漢人と結婚した女性の受けた教育は高くなく、結婚相手もほとんど社会労働階級に属していた。

漢人がモンゴル人と結婚したがる理由は、少数民族への産児制限上の優遇措置（第二子、第三子までの出産を認める）による。父系出自体系を持つ漢人社会において、男子の出生が望まれることは言うまでもない。従って、モンゴル人が漢人と結婚することは、漢人がモンゴル人を利用するためと考えてもよい。漢人との通婚で生まれた子供は、優遇政策のため少数民族籍を選ぶ。

都会において教育を受けている若者の結婚に対する志向としては、自分が気に入ればモンゴル人、漢人を問わないが、希望相手としてはモンゴル人を選ぶ人、が漢人を選ぶより圧倒的に多いのである。私の調査では、300人（有効回答数）の内、結婚希望相手はモンゴル人を希望するのは、63%（189人）で、漢人は3%（8人）、民族関係ないと思っているのは34%（103人）である。

通婚当事者以外の人々は、通婚する人々に対して差別的な見方をもっている。つまり、お互いを利用しあうことしか考えてない、というわけである。モンゴル民族は自民族の男たちを怠け者、酒好きなどの理由で、漢人を選ぶ。漢人は子供をもう一人多く生めるなどの理由でモンゴル女性を選ぶ。両民族の間には、純粋な愛から出発した結婚は考えられないのである。

内モンゴルにおけるモンゴル人と漢人の間の通婚をトゴルダイガチャの例から見た。しかし、トゴルダイガチャには、二〇年ほど前、一九八〇年代から通婚が始まったがいまだにモンゴル人年寄りから反対を受けている。トゴルダイガチャは内モンゴル地域において、モンゴル人多数を占める数少ないガチャの一つで

ある。このようなモンゴル人多数な地域でさえ通婚現れていることは、内モンゴルの他の地域で通婚はいかに進んでいるかを想像できる。

## 第二節 日常生活におけるモンゴル人と漢人の関係

### 1. 伝承でみる漢人とモンゴル人関係（中秋節）

漢人とモンゴル人の対立関係を伝える民間伝承はいくつか存在する。Aは中秋節（旧暦の八月十五日）をこう話していた。「中秋節とはもともとモンゴル人を殺す日だった。『八月十五殺韃子』<sup>6)</sup>という。『八月十五日』とは漢人にとって大きなイベントの日で、最近まで漢人らは西瓜に人の顔を描いてそれをモンゴル人の顔にたとえ、包丁で刺し、食べていたそう。現在モンゴル人の若者はなにも知らず、中秋節になるとお祝いをする。うちは家族の集まりをしないで、子供たちは電話をしてくるだけである。漢人の若者、特に都会育ちだと、モンゴル人を殺す日だということを知らない。現在『八月十五日』とは、せいぜい家族で集まって食事をしたり、月餅を楽しんだりする日という意味しかない」。

### 2. 漢人牧畜民

Aの住んでいるトゴルダイガチャは牧業地区である。漢人の人口はモンゴル人より少ない。トゴルダイの510人のうち漢人は30人程度である。トゴルダイにおける八戸30人の漢族は、モンゴル族の定住後に、陝西省から移り住んできた。一九五〇年から一九六八年の間、八戸の漢人のうちの何人かをこちらのモンゴル人が陝西省から呼んだという。モンゴル人は漢人に家を立てる仕事を任せ、畑の仕事もやらせた。一九四九年共産党政権ができ、一九五八年に各家の家畜と畑はすべて「人民公社」に没収され、国の財産となった。一九七九年に、人民公社制度を廃止して個人請負制に移行するという方針がだされ、「国の財産」は改めて各家に分与された。ウーシン旗においては、公有化された家畜が一九八二年に個人へ再分配された〔楊 2003 a: 78〕。

トゴルダイガチャでは、一九八三年に家畜請負制が始まり、翌八四年に、牧野が分割された。当時、元の住民にしろ、後からの移民にしろ、その地域に住んでいれば誰でも家畜と牧野を受けることができた。トゴルダイガチャの八戸の漢人にもモンゴル人と同様に家畜と牧野が与えられた。平等に分割されたのだから、牧畜民の間に貧富の差は見られないはずだが、分割された牧野の草質は違うし、各家庭の具体的な牧畜経営

法の違い、労働力の違いから貧富階層が現れてきている。

トゴルダイガチャの人々の貧富差には大きな差がないと言える。豊かな家は家畜 120 頭の羊と 20 頭の牛を持ち、貧困な家だと羊 50 頭と牛 2 頭くらいである。八戸の漢人は全員が豊かであるという。理由はよくわからないが、たぶん漢人は働き者だからだろう、と A は言う。

牧畜の漢人家庭も羊や牛を飼って、乳製品を食べる。モンゴル人の牧畜民は豚やロバを飼って、「ホイーサイ」と呼ばれる中華料理と思われる料理を食べる。ガチャが定期的に行う会議に全員が欠かさず参加する。隣人のモンゴル人娘の結婚式、子供の十二歳の誕生日に出席する。お祝いを行うときに漢人を招待する。

オルドスのウーシン旗はもともとモンゴル人の住む地域だった。中華人民共和国が成立する以前にウーシン旗に移住していた漢人には「蒙地を借用」している観念が強いのに対して、共産党政権になってから移ってきた漢族には、政府から与えられた「人民公社の公有地」という感覚しかなかった。[楊 2003 b: 294]

モンゴル人にしろ、漢人にしろ、みんな中国人で、土地、牧野は全部国のものである。人々に使用权はあるが、所有権はあくまでもない。漢人はモンゴル人に負けない良い牧野を手に入れた。貧しくなることは決してなかった。こうした結果を、ハイシッヒは「長城外地域の問題の解決策を、モンゴル人を定住化させ、漢化させ、中国の過剰人口のための補足的な生活圏を開設することに見だした。モンゴル人の教育として打ち出された政策は中国規格に合わせたもので、最高だと自認する優れた漢文化にモンゴル人を近づけ、引き入れるために適したものであった。国民党の理念を帯びている中国国民政府の考え方の中にも、北方の未開な野蛮人に対する儒教の優越感が含まれていた」という [ハイシッヒ 2000: 307]。

### 3. 雇われる先での摩擦

A の雇っている漢人は、その八戸の内のひとりで、六十歳の漢族の男性で李である。一九五六年に陝西省から兄についてウーシン旗に来了。モンゴル地方を歩き回って、毛氈を必要とする家に行って毛氈作って生活を立てていた。現在の李の家は、A の家から 30 キロ離れたところにある。兄はすでに亡くなり現在は甥の家族と一緒に住んでいる。A は現在では奥さんと二人暮らしをしていて、身近に子供がいないため、

人を雇って家の羊や牛の世話をしてもらい、時々ご飯も作ってもらう。A はこの十年間ずっと人を雇い続けた。モンゴル人女性、男性、漢人男性を雇った。

現在では、モンゴル人、漢人を問わず、誰でも出稼ぎをする。出稼ぎをする人は貧しい、という概念は崩れている。以前の「ライグン、ヒタッデ」(出稼ぎの漢人)という見下ろした言葉は「グチュンフムン」(手伝いの人)という言葉に変わっている。

出稼ぎで賃金は、一日 20 元から 30 元だと A に聞いた。かなりいい収入で暇あればみんなやりたいくらいだそう。李さんの収入は一日 18 元だが、長期間雇っているからだ、と A が言う。冬の時期に牧畜での仕事が減り、住民は手伝いを雇う必要はなくなる。李は一年中仕事があるし、重労働ではないため、A と同居して雇われることに同意した。しかし、秋の忙しい時期になると給料をあげてほしいと李は言い出す。A は、李は年寄りだし、忙しい時もあれば、暇の時もあるからと言って、給料を上げることを後に延ばす。A は李を雇う前にモンゴル人の若者を使ったが、二日間仕事して三日間酒飲む人だったという。

最初は李の作る料理の味が口に合わなかった。醤油やトマトをたっぷり入れた濃い味付けの料理だった。一緒に住んでいるうちにお互いに慣れてきた。彼も年寄りだし、少し働くとすぐ息を切らしてしまう。A が他人とのことでもめると彼は A 側に立ったりする。A が、返してくれなさそうな隣人に金を貸したら、李は心配したという。隣人の妻が病気で 400 元を貸したのだが、李は A に「彼に金を貸して、返してくれるのか」と、返しそうにない人に金を貸す理由を知ろうとした。

A は、李に苛立ちを感じたこともあった。賃金とは別に渡しているタバコ代を李はとっておいて、タバコを吸っている A さんを見かけたらタバコを欲しいというのだ。やはり漢人は違う、と A は言う。トゴルダイでも、漢人の勤勉さ、特にずる賢さについて、ステレオタイプのものの見方が残っている。モンゴル人は、称賛と侮蔑の入り混じった目で漢人を評するのが常である。

漢人とモンゴル人が混じり合って生活するようになった現代においては、どちら側でも雇ったり、雇われたりする。A が言うように、「昔モンゴル人は出稼ぎに行かなかったが、現在は、出稼ぎのモンゴル人も多い」。モンゴル人若者が出稼ぎに行くことは、モンゴル人は与えられた牧畜地での生産だけで、生活していないことを意味している。

A と李は、同じ料理を食べ、同じ部屋に住み、同じ世間話をし、二人の関係は雇うと雇われる関係における単純な金銭関係を越えたように見えるが、二人はお互いを見下ろしている。李は、A が「軽率」に人に金貸しをすることに対して見下ろす。A は、タバコで「ずる賢さ」を働かす李を軽蔑している。こうした、モンゴル人は「愚かで」漢人は「ずるい」というステレオタイプの見方は両民族の間に深く存在しているようである。

## 第四章 結 論

### 1. 「想像された」民族

エリック・ホブズボウムの「伝統の発明」論、そしてベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体論」が誕生して以来、「民族」は想像されたものだと考える研究者が多く出た。民族の客観的でもっとも重要な属性として取り上げられる伝統を、ホブズボウムは「『伝統』とは長い年月を経たものと思われ、そういわれているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものである」という [ホブズボウム 1983 (1979) : 9]。

アンダーソンは、『想像の共同体』のなかで、「ナショナリズムとは、ネイションの自意識の覚醒ではなく、もともとそこに存在しなかったネイションを創出＝捏造することだ」とネイションが創られたものだということを強調している。[アンダーソン 1997 (1991) : 24-25]。小田亮は「その点で、この本は民族に関する虚構論、構築主義の古典的業績とされてきた」という (小田 2003 Web 版)。

### 2. 民族虚構論に対する反対論

しかし、それに対する反対論者も存在する。歴史主義者アントニー・スミス (Smith 1986) が用いるアプローチを挙げたい。スミスは、アンダーソンや・ホブズボウムの想像理論について、以下の三点を指摘する。第一点は、この理論はネイションの社会的現実を強調し、ネイションの一般性を主張するが、一般性では把握できない宗教的要素、人種的要素、エスニックな対立などがあること、第二点は、この理論は物質中心主義的なものであるが、ナショナリズムとは工業化された社会だけではなく前工業的社会にも、富んだ社会にも貧しい社会にも現れること、第三点は、彼らの理論によればネイションとナショナリズムは近代化の産物であるというが、このことによりエスニックな

紐帯と文化的感情の持続性を見過しているということである [スミス 1999 (1986) : 322]。

## 第二節「言語をもたない民族は心をもたない民族」

### 1. トゴルダイガチャのモンゴル人

部族、エスニック・グループから、近代社会では「民族」とされた内モンゴルのモンゴル人にとっては、「民族」のあり方は様々であった。モンゴル語しかできないモンゴル人、中国語しか話せないモンゴル人、両方を話せるモンゴル人など、モンゴル語のレベルはさまざまである。調査地のウーシン旗のトゴルダイガチャのモンゴル人は、全員がモンゴル語の話者で、中国語は日常会話の程度である。彼らにとっては、「民族」は現実的なものであった。モンゴル語を話し、モンゴルの伝統習慣を守り、モンゴルの独自性を持つことは民族生活者にとっては当然のことだと信じている。その中で、言語は民族境界のマーカーとして意識している。中国語話者が「他者」であり、モンゴル語話者が「同胞」である。モンゴル語を知らないいわゆる「漢化された」モンゴル人を「完璧なモンゴル人」として見ず「中途半端なモンゴル人」としか見ない。

トゴルダイガチャは、モンゴル人が多数で漢人は少数を占める内モンゴル全体地域と違った、モンゴル人が少ないコミュニティの一つである。モンゴル語の方言のひとつであるオルドス語を話し、オルドスモンゴル人としてのプライドを持っている。しかし、どんなに伝統を持っていたとしても、外からの影響、つまり中国語の影響がないわけがない。トゴルダイガチャのモンゴル人でさえ、中国語の必要性を感じる。そのため、他の人より、子供にどんな言葉で話したらいいか、学校をどこに行かせたらいいか、誰と結婚させたらいいかという、モンゴル民族を取るかそれとも漢族を取るかという民族をめぐる悩みを抱えている。民族を外して考えれば、彼らは普通の人間であり、普通に生活している。国家語と民族語が一致していれば、この悩みは起こるはずがない。この悩みが日常生活における内モンゴルモンゴル人のリアルな悩みである。

### 2. 内モンゴルのモンゴル語は死ぬ

内モンゴルのモンゴル語は経済、社会的に恵まれずほとんど家庭言語と言っても過言ではない。それに伴い、内モンゴルにおいては、モンゴル人自身も民族語に対する認識を変えつつある。「民族文化」の担い手を自認する民族のエリートたちは、周囲とりわけ田舎

の同胞に対しては、民族語をはじめとする民族文化のかけがえのなさを主張する一方で、自らの子供に対しては実用性の高い中国語を学習させているのが実状である。

### 3. 言語消滅の意味

言語の死をなぜ気にするかと言えば、なぜ瀕死の言語をほっとおいてはいけないのかという問いに対するD. クリスタルの答えに見る価値があるからである。彼は、言語は民族的独自性を表現するから、言語は歴史の宝庫だから大切であるという。そして彼はあるウェールズのことわざを引用して、「(言語をもたない民族は心をもたない民族)」、民族言語の重要を強調している [D. クリスタル 2004 (2000) : 51]。

内モンゴルのモンゴル人エリートに多く見られる一つの考え方とは、内モンゴルのモンゴル語は遅かれ早かれ死ぬだろうがモンゴル語は死なない、なぜならモンゴル国があるからという。つまり、内モンゴルのモンゴル語はおそらく死ぬだろうという理由は、内モンゴルが国ではなく、中国のひとつの地域であるからである。彼らは内モンゴルのモンゴル語の危機を承知しながら、希望をモンゴル国に託している。我々は消滅しても、我々の文化をモンゴル国の人々は守って維持してくれるだろうと楽観的な見方がある。しかし、モンゴル国はすでに内モンゴルの「同胞」を「同胞」として見てない [Bulag 1998 : 184-188]。

### 第三節 「民族」的なものと「民族」の意味

民族とは想像されたものであると学者たちが見ている。しかし、想像されたものだから、存在しないとは言っていないのである。日常生活において、民族当事者が民族を意識させられる状況にたまたま合うことになる。現在内モンゴルにおけるモンゴル人たちはまさにその例の一つである。

内モンゴルはもともとモンゴル人が住んでいた地域であった。後から異なった文化、異なった歴史、異なった言語を持つ漢人が入ってきた。清朝、中華民国、または中華人民共和国の歴史的な段階によって、入ってきた漢人の人口はその土地に住んでいたモンゴル人よりはるかに上回り、モンゴル人は少数派となった。1949年に中華人民共和国成立後、中華人民共和国は56の民族があると宣言し、モンゴル人は「モンゴル民族」になり、56の「兄弟民族」の一員になった。中国という「大家族」の一員であるため、中国の多数派である漢族の入植を拒否することができない。漢人が

多数入ってきたため、内モンゴルは現在のように漢人とモンゴル人が一緒に住むことになった。

こうした漢人と一緒に生活することにつれ、異なった文化、歴史や言語から刺激を受け、自らの民族アイデンティティを気づかされる。漢人との接触によって両民族に文化的な変化が現れている。しかし、中国の中にいるため、漢語は国家レベルでの言葉であり、使われる範囲は広い。その反対に、モンゴル語はますます使う人が減り、家庭言語になりつつある。漢語の重要性に目を覚めたモンゴル人の親らは子供を漢語学校に通わせたため、モンゴル語学校が合併や閉校に陥り、モンゴル語の消滅がさらに進んだ。「先進民族」の漢族と結婚する人が多く現れ、「純モンゴル血」も汚染される危機にさらされている。

民族は空想で、想像で、生物学的に意味がないかもしれないが、民族当事者にとって、民族の意味は大きい。彼らは、頭の中で民族を想像し、心の中で確認し、民族アイデンティティを主張し続ける。それは単なる歴史を誇る民族のプライドやルーツを知るために民族を主張するものではなく、民族的なものを失った人々が、力持ち民族への対抗と不満でもある。しかし、所謂民族的なものが失われることによって、民族はけっして消滅しない。政治や経済などにおいての力関係のせいで、民族的なものを失う羽目になった人々は、けっして心の中の信念を失わない。想像された民族は彼らの心の中で存在している。民族的なものがなくなっていくほど、彼らの民族意識が強くなるのだ。だから、民族を完全に失った人々は民族語を取り戻す運動を起こしたり、民族のイベントを復活させたりするのだ。民族とは想像されながらも、実にリアルに存在するものである。

### 注

- 1) 外蒙の蒙古人は逸早く彼等自身の国家の設立を企て、1919年から20年に至る短期間を除き、1911年以来事実上支那より独立して居る。[ラティモア 1934 : 3]
- 2) 内モンゴル独立運動の指導者 (1902-1966)
- 3) 「新しいを作り、蒙古言語文字を発展させるための努力」内モンゴル自治区民委、語委。中国民委が二〇〇四年に開かれた「中国民族言語文字工作会议」での内モンゴルレ民委・語委のレポートによるものである。
- 4) 『蒙古語文工作文件選編』(1953-1997) 1997 : 1
- 5) サンプルに選んだ学校は、1953年に設立された、三年の総合大学である。生徒のほとんどは、高校卒業までモンゴル語学校に通って、受験を通して進学して入ってくる学生である。アンケートにおける質問は、具体的な項目としては、モンゴル語の使用、中国語能



力、名前、結婚相手の選択などに関する質問である。アンケートは18歳から23歳までの381人を対象にした。調査票の使用言語はモンゴル語である。有効回答数300件である。

- 6) 元朝の末、明朝の創始者、朱元璋が八月十五日にモンゴル人を襲った。モンゴル人の統治に苦しんでいた漢人は、餅の中に書いた紙片「韃子を殺す」を隠して、中秋の日に蜂起したという物語がある。[Latsch 1984: 80]

#### 引用・参考文献

##### 〈日本語文献〉

- アンダーソン, B 1997 (1991) 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの流行と起源』白石さや、白石 隆 訳, NTT 出版 (Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso)
- オウエン・ラティモア 1934 (1934) 『満州における蒙古民族』後藤富男訳 善隣協会 (Owen Lattimore, *The Mongols of Manchuria*, John Day)
- 岡本雅享 1999 『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
- 小田 亮 2003/12/10 版 (アクセス時間 2006 年 1 月 19 日) 『日常的抵抗論』Web 版  
<http://www2.ttcn.ne.jp/~oda.makoto/mokuji.12.10ed.htm>
- クリスタル, D 2004 (2000) 『消滅する言語』斎藤兆史, 三谷裕美訳, 中央公論新社 (David Crystal, *Language Death*, Cambridge University Press)
- 金岡秀郎 2000 『モンゴルを知るための60章』明石書店
- シンジルト 2003 『民族の語りの文法—中国青海省モン

- ゴル族の日常、紛争、教育』風響社
- スミス, アントニー・D 1999 (1986) 『ネーションとエスニシティ』巢山靖司, 高城和義他訳, 名古屋大学出版会 (Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*, Blackwell)
- ハイシッヒ, ワルター 2000 (1964) 『モンゴルの歴史と文化』田中克彦訳, 岩波書店 (Walther Heissig, *EIN VOLK SUCHT SEINE GESCHICHTE*)
- ホブズボウム, エリック/レンジャー, テレンス編 1992 (1983) 『創られた伝統』前川啓治, 梶原景昭他訳, 紀伊國屋書店 (Eric Hobsbawm & Terence Ranger (eds.), *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press)
- 揚 海英 2003 a 「中国・少数民族地域の統計をよむ—内モンゴル自治区オールドス地域を中心に」『人文論集』54-1
- 揚 海英 2003 b 「漢族がまつるモンゴルの聖地」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社

##### 〈欧文献〉

- Bulag, UradynE. 1998. *Nationalism and hybridity in Mongolia*. Oxford: Clarendon Press.
- Latsch, Marie-Luise. 1984. *Chinese Traditional Festivals Beijing*: New World Press.

##### 〈中国語文献〉

- 札奇斯欽 1987 『蒙古文化與社會』台湾商務印書館
- 蒙古民委 1997 『蒙古語文工作文件選編』(1953-1997) 内蒙古民委
- 内蒙古自治区教育厅民族教育処 2004 『内蒙古民族教育工作手冊』内蒙古教育出版社